

岡崎久彦著「陸奥宗光とその時代」PHP文庫、PHP研究所2003年3月17日刊を読む

自分の力で運命を切り拓く

1.(1)さて、ウィーン滞在中の陸奥の勉強ぶりはほんものであった。

(2)ノートを見るだけでも、それは明らかであるが、ここでは、そのノートを受け取った返事と思われるシュタインの陸奥宛の手紙を引用する。

「講義録拝受。単に熟読しただけでなく、はなはだ愉快に感じました。わずか数か月の間に数百ページの原稿を整理することは容易なことではなく、たいへんなご勉強です。

私のような年になると、種々に期したことも中途半端で終わってしまうことも多いので、貴兄からご送付の講義録がかくも完全なのを拝見するにつけ、感に堪えません……日本人は知力がすぐれているだけでなく、精神の高尚なことは私がよく知っているところです……ご帰国の上はきっと目覚ましいご活躍のことと期待しています……」

(3)この陸奥の勉強ぶりに感嘆したのは、その師のシュタインだけではなかった。ウィーンの西園寺公使も二度にわたって、陸奥の勉強ぶりを伊藤に報告している。

「陸奥氏は今までは英国風の学問だったのですが、ヨーロッパに来てからは、また何か新たに感じられたところがあるようです。同氏の勉強ぶりは実に驚くべきものです」

「同人滞欧中は、たいへんな勉強ぶりでした。帰国後お会いになれば、きっと見ちがえるようになったとお感じになるでしょう。私が考えるには、陸奥のような人物を民間に遊ばせておいては本人にとっても損ですが、政府にとっても得策とは言い難く、願わくは、速やかに政府にご採用になってはいかがでしょうか。私は別に本人の肩をもってそう言っているわけではありません」

2.(1)人間はいくつになっても努力しなければならないものと思う。

(2)陸奥の才能についてはすでに何人も疑うところのない定評がある。また、権力の中樞に

いる伊藤などとの間にゆらぬ友情がある。

(3)それでも、このウィーンにおける勉強を西園寺が認めて伊藤に書き送ったということで、伊藤がどれだけ陸奥を見直したか。また、もともと陸奥を庇う気があったとしても、どれだけ伊藤が陸奥を引き立て易くなったか測りしれないものがある。

(4)もし、陸奥が、獄中でセンチメンタルな詩作にそのままふけていたら、そして、もしヨーロッパで、他の洋行人士と同じように、「今さら勉強という年でもない」と言って悠々と遊学していたならば、その後のような陸奥の将来はなかったであろう。陸奥はつねに、自分の力で自分の運命を切り拓いていったのである。

(5)幕末の大儒佐藤一斎(1772 ~ 1859年)は言っている。

わか 少なくして 学ばば 壮にして 為すあり  
そ 壮にして 学ばば 老いて 衰えず  
お 老いて 学ばば 死して 朽ちず

P208 ~ 210

#### [コメント]

不平等条約改正をはじめ日本外交の基礎を築いた陸奥宗光の一代記。5年間の獄中生活の直後、伊藤博文らのすすめと応援のもとで米国、英国そして欧州に1年10か月間勉強に出掛けたときの勉強ぶりがこの文章からよくわかる。自分の人命を日本の政治の発展のために捧げ尽くしてもかまわないという強い信念と使命感に基づいた勉強の様子がよくわかる。また、死所を得た、命を捨てる覚悟でのものごとへの取り組みは感動を覚える。こうして、日本の基礎は築かれた。

- 2010年6月14日 林明夫記 -